

Q & A

問題解決!



南部営農センター
園芸課
検校 哲也

Q1 プランターでの野菜づくりで気をつけることは、なんですか？

A1 野菜を育ててみたいけど、庭に広いスペースがない。農園を借りるのではなく、もっと手軽に野菜を育てたい。そのような方は、プランターで野菜を育ててみてはいかがでしょう。プランター栽培の注意点を説明します。

●日当たり
ほとんどの野菜は日当たりのよい環境を好みます。野菜が花を咲かせ、実をつけるとき、もともとも影響を受けるのが太陽からの光です。特に、トマト、ナス、ピーマン、オクラなど、夏に収穫する夏野菜は、強い日差しが必要です。

●風通し
野菜にとって、風通しも大切な要素です。狭い場所にプランターを多く並べたり、葉が茂りすぎて風通しが悪いと、病気が発生しやすくなります。壁などで風がさえぎられて、どんよりと空気がこもってしまふような場所はよくありません。風通しのよい場所に、適度な間隔をあけてプランターを置きましょう。風通しが良くて、エアコンの室外機の風は禁物です。

●水やり
水やりは、水分補給だけでなく、

土の養分を溶かす働きや、土にたまった古い水空気を洗い流す働きもあります。

ただし、水を何度もたくさん与えればよいというわけではありません。水をやりすぎて土が常に濡れていると、酸素が足りず根が窒息状態になり根腐れして、枯れてしまうこともあります。土の乾きぐあい、葉のしおれぐあいなどをよく観察して、土の表面が乾いたらたっぷりと水をやります。原則として水やりは朝に行いますが、夏場は乾燥しやすいので、土が乾いたら朝夕の二回、水やりをします。

●用土
プランターで野菜を育てるには、市販の野菜用と書かれた培養土を使うのが手軽です。多くの野菜の栽培に適するように、腐葉土や赤玉土などの土と肥料がすでにブレンドされていますので、初心者でも失敗せずに育てることができます。水はけや通気性も優れています。

元肥が入っているので、種まきや植えつけ時に、肥料を混ぜる必要はありません。手を加えずにすぐに利用でき、使う量だけ購入できるので便利です。自分で土をつくるときは、赤玉土60%、腐葉土20%、堆肥20%、元肥を入れて、混ぜ込みます。どれもJ A店舗で購入できます。



腐葉土や堆肥はしっかりと醗酵したものを選みましょう。少しだけ、土について説明します。

【赤玉土】
関東ローム層の火山灰土の下にある土で、有機成分は含んでいません。通気性がよく、保水性に優れ、鉢植えなどにもよく用いられる土です。

【腐葉土】
広葉樹の落葉を集めて腐敗させた土です。適度の湿り気があり、排水性、保水性に優れています。

【堆肥】
牛糞など家畜糞と落葉やワラなどを微生物の力で分解し醗酵させたものです。保水性、保肥性を高めるはたらきがあります。

Q2 プランターの土を再利用するには？

A2 野菜を栽培したあとの土は、使い捨てずに何度も利用しましょう。ただし、同じ土で何

度も野菜を作ると、病原菌や害虫が残っています。そこで、手を加えて再利用します。ひとこと言うと、天日干しです。

- 1 使った土をシートに出し、1〜2日乾燥させます。
- 2 大きな根などの残りくずを取り除き、鉢底石と土に分けたら、天日に当てて土がさらさらになるまで乾燥させます。
- 3 土をビニール袋に入れてジョウロで水をかけて全体を湿らせて密閉し、日当たりのよい場所に10日ほど置いて熱殺菌します。



- 4 袋から土を出し、苦土石灰(標準的な20ℓプランターなら一握り40g)を加えます。再生土だけでは足りませんので、腐葉土または新しい培養土を足して混ぜます。
- 5 肥料は、古い土1ℓ当たり3gほどの化成肥料を混ぜます。苦土石灰と元肥を同時に混ぜると、アルカリ分と肥料の窒素が反応して窒素が逃げてしまいます。1週間ほどずらして入れましょう。

●連作に注意！

土を再利用する場合、気をつけなければならぬ注意点があります。同じ野菜や同じ科に属する野菜を、同じ土で連続して育てると、病原菌が増えたり、土壌養分が偏ったりして、野菜が育たなくなりやすくなります。これを連作障害といいます。

夏野菜は、ナス科とワリ科が多く、トマト、ピーマン、ナスなどがナス科で、キュウリ、スイカ、カボチャはワリ科です。意外なのが、ジャガイモで、トマトと同じナス科です。小松菜、ブロッコリー、キャベツ、白菜、大根などはアブラナ科です。枝豆やエンドウ豆はマメ科、ネギはユリ科、ホウレン草はアカザ科、レタスはキク科、イチゴはバラ科です。

同じ科の野菜を連続して作らないよう注意しましょう。

オンライン
農業塾は
こちら

動画はコチラ



管内の
病害虫情報は
こちら



家庭菜園
情報は
こちら

